



8th Album

YMOの原型とNYハウス・ミュージックの邂逅
クール＆モダンな意匠の再結成アルバム

文 吉村栄一

1993年5月発売の、YMO再結成（再生）アルバム。これまでのところ、YMOの残した最後のスタジオ・アルバムでもある（権利上の関係で、YMOの名前の上にパツ印が付けられリリースされた）。

10年ぶりのYMOの再結成は、同時に1980年代のYMOの活動以降に、メンバー3人の音楽的志向がそれぞれに変わり、YMOとしての共通言語を模索していく過程であったようにも思える。

音楽業界にはまだまだバブル経済の華美さと奢侈（しゃし）がふんだんに残った頃の再結成だけあって、膨大な予算と期間がかけられた贅沢なアルバムでもある。

レコーディングはまず1992年11月に東京都内にあるファッション・デザイナーの山本耀司のアトリエでスタートした。膨大な機材とともにメンバー3人の10年の空白期間を埋めるためのリハビリテーション的なブレイン・ストーミングやアプリ・プロダクションが行われ、同年12月にはビクターの青山スタジオで翌年1月までレコーディング。YMOのアルバムのレコーディングがアルファのAスタジオ以外で行われたのはこれが初めて。

1993年2月からは坂本龍一が居住しているニューヨークに舞台を移してのレコーディングとなり、途中休憩を挟みながら3月までの作業となった。

このニューヨークでの録音が、このアルバムの方向性を決定付けたのかもしれない。3人の間から立ち昇ってきたYMOの原型のようなものが、ニューヨークのハウス・ミュージックと、アメリカの現代文学、現代美術の意匠を施されて、クールでモダンなこのアルバムとなった。

（この時点では）音楽的指向がまったく違った音楽家3人が外的な要因とふんだんな予算を使って作り上げた人工の怪物、それがこの「テクノ」だろう。この3人にとっても、まさにこの時期にしか作ることが出来なかった不思議な作品となった。21世紀の、エレクトロニカという共通言語を背景にした自然な再集結と比べると面白い。

01 BE A SUPERMAN

作詞：坂本龍一、高橋幸宏／作曲：坂本龍一、高橋幸宏

ニューヨークで録音されたこのアルバムの中でも、エレビのコード進行や乾いたキックとハットの音色、そして「スーパーマン」という単語が一層ニューヨーク感を醸し出しています。幸宏さんの「ごめん」は有名ですが、よく聴くと4回もサンプリングされていました。細野さんの少しひねくれたベース・ラインがこの曲をポップに仕上げていて、それこそがYMOらしさだなと思わせる名曲です。スneaの位置（2拍目と4拍目）にくるパーカッションがとても独特で（主にピッチが高めのタムと、上品なおならのような音と、歪んだ金属音）真似したくなりました。

02 NANGA DEF?

作詞：坂本龍一／作曲：坂本龍一、YMO

2曲目で超絶アシッドが来ました！ バキバキの4つ打ちとTB-303だけで、いつまでも聴いていられるようなトラックですが、そこにアフリカンなパーカッションとジメツとしたコーラス、そして「ナンガ・デフ・マガ・ニフェレク」という、気になるフレーズがダウンナーな祝祭感を盛り上げてくれます。当時は世界的なアシッド・ハウス・リバイバル期なわけですが、2011年発売のベスト・アルバム『YMO』にも収録されていて、決して古くなることのない曲だなと実感します。TB-303は持っていないのでアトモシンセのMochikaでこのベース・ラインを再現してみたいなあ。

03 FLOATING AWAY

作詞：ウィリアム・ギブスン／作曲：高橋幸宏、細野晴臣

ベースはアープOdysseyですね！ シンプルなフレーズを延々繰り返すカッコよさ……。同年の細野さんのソロ『メディスン・コンピレーション』でも聴くことのできる、アンビエント＆ファンキーなリズムに幸宏さんのタイム感が絡んできて、とても気持ちが良いです。緊張感や浮遊感により、シンセでしか表現できない音の彩りが際立ちます。このアルバムはアコースティックでやるという案もあったそうですが、最終的にはピンテージアナログ・シンセをたくさん使っているの好きな音を見つけるのが楽しいですよ。

04 DOLPHINICITY

作曲：細野晴臣

イルカの鳴き声をサンプリングしたという曲。「BE GOOD BOYS」の声はイルカの調教師がイルカに語りかけているものだろう。再生したYMOの新しい「ポップ」（自然を感じる喜び）と「アンビエント」（自分を包む現実すべて）を感じられます。基本のビートとベースで肉付けされた楽曲が続きますが、このアルバムは、コンセプトが固まる前にリズム・トラックが先行して何曲もできていたそう。無意識を大切に、音そのものを突き詰めるやり方が「テクノ」らしく、行ったら帰ってこない感じ。でも簡単には行かせてくれない感じ。このトラックのあっさりした4つ打ちでようやく聴く方も肩の荷が降りるというか、このアルバムの楽しみ方が分かってきてリラックスできる気がします。

05 HI-TECH HIPPIES

作詞：YMO／作曲：YMO

アルバムの中ではとてもキャッチーな楽曲。歌い出しの歌詞は「Itsy Bitsy Teenie Weenie Yellow Polka-Dot Bikini」（ビキニスタイルのお嬢さん）をもじって細野さんが書いたものだろう。90年代に登場した、従来のヒッピーとは違い主張し過ぎない、穏やかでスマートな都会のヒッピーが自由に生きていくという空気がそのままだ曲になっているように感じました。現実から数センチ浮いているような雰囲気グセになる。ストリングスのメロディと、金属ばいシンセ・リフのコンビネーションが素晴らしい。この曲を3人で作っているというのが素敵。意外とキックと歌のレベルが大きい！

06 I TRE MERLI

作曲：YMO

「ライディーン」をより黒澤映画に近付けたような、騎乗戦闘シーンを思わせる1曲。イントロのランダムなLFOから風の吹く音、そして重たいドラム・サンプルにじりじりと追い詰められる。「ライディーン」は冒頭のメロディが「レ・ミ・ファ」で、「I TRE MERLI」は「シ・ド・ド・レー（ゆっくり）」なもの狙っていますよね。東京ドームでのライブ映像「TECHNODON LIVE」では白黒フィルム風のエフェクトがかかってとても男前。さらにこの曲が終わって明るくなり「HI-TECH HIPPIES」に行くときのイントロで順に映る3人の表情がみんな楽しそうなのが好き！